

第20回 NIE 全国大会秋田大会に参加して

県立鶴翔高等学校
地歴公民科 園田 美雪

1 はじめに

NIE 全国大会へは2回目の参加となる。1回目は第15回熊本大会（平成21年7月29日、30日開催）である。その時は、研修として自費で参加した。熊本大会以来、全国大会には参加しなかったが、本年度から NIE 実践校として承認していただき、この度、全国大会に参加する機会を得た。

ご存知のとおり、秋田県は、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）において、全国トップレベルの成績を維持しており、秋田県の学力やその基盤となる様々な要因について、全国にとどまらず、海外からも注目されている。

今回参加した大きな理由は、まさにそこにある。NIE に関する様々な実践報告の中からその秘訣を探り、自らの実践に活かしたいと思い、全国大会に参加させていただいた。

そこで今回は、参加した分科会並びに講演会から、特に自らの実践に取り入れやすいものなどを中心に発表させていただきたい。



2 全体会から

(1) 基調講演①

秋田県 NIE 推進協議会会長で、秋田大学の阿部昇氏は、NIE は21世紀型の学力を豊かにするものとし、新聞が言論をリードする存在であることを考えた時、新聞は民主主義の成立に不可欠なものであるとした。

また、新聞にとって「厳しい読者」を育てるためには、今大会のテーマでもある「問い」を育てることが不可欠であり、「18歳選挙権」により、昨今特に取り上げられることが多い「主権者教育」においても NIE が果たす役割は大きいという指摘であった。

(2) 記念講演 『『今を生きる力』を育てる新聞～40年にわたる新聞活用実践を通して』

マスコミでも活躍している、教育評論家で法政大学教授の尾木直樹氏の講演では、特に「書きなれノート」に感銘を受けた。段階的に取り組ませることで、生徒が主体的に次のステップへと進んでいく様子は、新聞を活用した教育実践のあるべき姿だと感じた。

自ら新聞を手にし、新聞が普段の生活の中にあれば、多角的な視点や読解力が身につくであろう。そういった「仕掛け」を学校の中でどのように構築していくかが課題である。

(3) パネルディスカッション

それぞれの立場からの発言を聞き、横のつながり、縦のつながりが普段から緊密にできていることに正直驚いた。今回の研究テーマは、研究大会用に設定されたものだろうと安易に考えていただけに、共通の目標に向かって日ごろから真摯に教育に取り組んでいる様子に感動した。

3 高校分科会②

(1) 「新聞社説を比較して検討することを通して、書き方や表現の工夫について考える」

文部科学省からスーパーグローバルハイスクールの指定を受けている秋田県立秋田南高等学校の学校設定科目「国際探求Ⅰ」に関する発表は、「EPA」に関する2つの地方紙の社説を読み比べて、内容の比較や表現の差異などを吟味して、最終的にどちらの主張を支持するかというものであった。社説を比較するという取り組みは決して新しいものではないが、科目の性質上、国語や地歴公民の教員が連携して行っている点、また、生徒の様子などを見ると、確かな学力に裏付けされた実践であることが伺え、その質の高さに大変驚いた。また、意見の異なる地方紙を扱ったことも特徴的であった。

(2) 「蓄積した新聞記事を活用して自分の将来と夢を考える」



秋田県立雄物川高等学校の「総合的な学習の時間」に関する発表は、生徒が興味関心に基づいて職業に関する新聞記事のスクラップを行い、それを元に自らのライフデザインについて意見を述べ合うというものであった。3年間の計画に即して行われており、学校全体でキャリア教育とNIEを結びつけた実践であるという点が印象的だった。生徒も堂々と発表しており、大変好感が持てた。しかし、発表後の質疑応答では、

今回の内容は、3年生のこの時期のものとしては、今後の就職活動の日程を考えると遅いのではないかという指摘があった。これについては、すでに三者面談を行い、具体的に活動しているとのことだった。

4 秋田の取り組みから見てきたこと

全体会や実践発表をとおして感じたことを、秋田県の教育実践に関する著書などを参考にしながら、3つの視点から述べてみたい。

(1) 子どもたちの気質

パネルディスカッションの中でも指摘されていたが、秋田の子どもたちの素直でまじめという気質が、学力の高さ、さらには今回のNIEの授業実践の質の高さにつながってくるのではないかと感じている。また、秋田では授業で「学び合い（子ども同士が考えを出し合う）」活動を取り入れることが多いとの指摘があるが③、それは現在話題となっている「アクティブ・ラーニング（主体的・協働的な学び）」そのものである。元々まじめに取り組む

生徒たちが、共働的な学びを先駆的に取り入れてきたことによって、基礎・基本が定着し、学力の向上へとつながっているのではないかと考える。ちなみに秋田県は全国体力テストの成績も上位であり、平成25年度の学校保健統計調査によれば身長も日本一とのことである④。心身ともに健康で、学習に積極的に取り組んでいる姿が想像できる。

(2) 生徒と共に頑張る教師

次に、教師の取り組みである。これについて、「少人数学習推進事業の実施」、「個に応じたティーム・ティーチング（以下、TT）の導入」、「授業の成立を第一に考える」の3つの視点が、秋田県の教師の取り組む姿勢へとつながっていることが指摘されている⑤。つまり、きめ細やかな指導を行政が主導し、現場の教師たちがそれに真摯に取り組んでいるのである。さらに、TTについては、空き時間の教師が、担当ではない別のクラスに入ってTTを行うこともあり、秋田県の教師の授業力と同僚性の高さがうかがえるという報告もある⑥。パネルディスカッションでも感じたことだが、立場は違うが、教育という営みをどのように発展させ、子どもを育てていくかという共通した目標（課題）に向かって連携して取り組んでいると感じたことは、私だけではなかったようである。

(3) 家庭学習の徹底

秋田県の子どもたちの学力の高さの秘密は学校だけにとどまらない。それは家庭学習の徹底にもある。基本的な生活習慣を徹底させ⑦、「家庭学習ノート」という秋田県の家庭学習の特徴として挙げられる取り組みを毎日継続させている。この「家庭学習ノート」の徹底ぶりは、仮に県内の別の学校に転校したとしても、転校してきたその日にも提出する事例もあるとおり⑧、県下の学校で徹底して取り組まれているものの一つである。「毎日続けて学習する」、「自分で学習内容を決める」、「基礎学力の定着に重点を置く」ことが秋田県の家庭学習のポイントであり、そこには学校から指定されて取り組む「宿題」とは区別されているのも特徴的だ⑨。このように、学校・家庭・行政における「つながり」が豊かな状態こそ、学力の高さにつながっているのだろう。

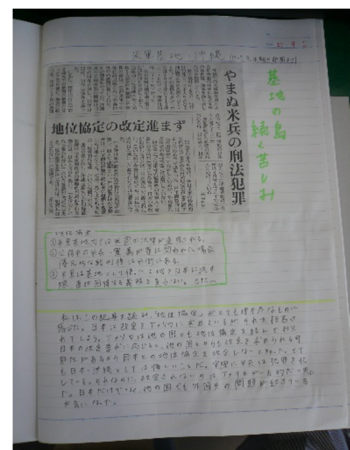
5 実践につなげるー「学びの一步」から「還元の二歩」へ

私がこれまで取り組んできたものに加え、今回の全国大会の発表を参考しながら、現在本校で実践しているものを紹介したい。

(1) 「書きなれノート」から「新聞スクラップ」へ ～小論文指導の一環として～

現在大学や短大の推薦入試に向けて、数名の生徒の小論文指導を行っている。

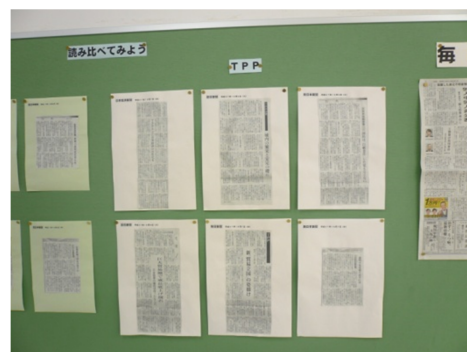
生徒には、尾木氏が紹介していた「書きなれノート」を参考に、現在購読している「朝日新聞」、「読売新聞」、「毎日新聞」、「西日本新聞」、「日本経済新聞」、「南日本新聞」の6紙から志望する学部や学科に関するもの、自分が興味関心を持った記事を選び、それをノートに貼らせ、「書きなれノート」のような取



り組みを行おうとした。生徒たちは私の期待をいい意味で裏切り、記事について分からないことを「政治・経済」の教科書や資料集を用いて調べてまとめ、さらに記事について自分の意見を書くことを自主的に始めた。これはうれしい誤算であった。生徒も多くの記事に触れ、小論文を書く上で必要な知識を得ることができており、以前に比べ自信を持って課題に取り組んでいる。

(2) 社説の読み比べ

これは秋田南高校の実践で紹介されたものであるが、まず、資料として掲示してみようと考えた。現在本校で設置している「NIE コーナー」の空いたスペースに「安保法制」、「TPP」、「内閣改造」と3つのテーマについての社説を6紙分掲示した。授業に行くクラスで感想を聞くと、内容はやはり難しいと感じる生徒が多いが、小論文や就職試験で利用している生徒は、目を通していただけた。授業での扱い方を今後検討し、国語科などと連携して読み比べの実践を考えてみたい。また、こういった大きなテーマで、社説が一斉に取り上げているものがあれば、読み比べの資料としてストックしていきたいと考えている。



(3) 進路につなげる ～3年生の利用促進～



生徒を見かけるようになった。

前述した取り組みと重複するが、現在6紙の新聞を購読している。これは、3年生の就職試験や小論文に活用してほしいと考えたからだ。NIE コーナーは3年生の使用頻度が高い教室の後方に設置して、新聞の保管と、各新聞の1面と本校の関連記事の掲示を行っている。教室に来た生徒はもちろんであるが、職員もよく読んでいるようで、話題にもよく上っている。また、放課後も3年生を中心に活用し、新聞を読んでいる生徒

(4) 授業に持参する

本校の生徒の中で、普段から新聞を読む習慣がある者は少ない。週1回、朝読書の時間に新聞記事を読み、感想を書く取り組みも行っているが、やはり新聞は生徒の生活圏の外にあるように感じていた。そこで、現在私が担当している「地理A」と「現代社会」の授業では毎時間新聞を少なくとも1紙は持って行き、生徒に記事を紹介する取り組みを行うことにした。「安保法制」成立の日には6紙とも1面がその記事だったので、6紙全て持って行き、生徒に1面が見えるように持たせたところ、他の生徒からは全てが同じテーマであることへの驚きから、どよめきが起こった。取り組みを工夫しながら、生徒にとって新聞は身近なものであり、実は面白いものだということを実感させ、普段から手に入る生徒になるように今後も何らかの「仕掛け」を作っていきたい。

※ 本校の取り組みの成果や詳細については、また、改めてご報告させていただきたい。

6 むすびにかえて

今回全国大会に参加させていただき、また、9月から新聞の購読が始まったが、前述したように、少しずつではあるが、生徒の学校生活の中に新聞が浸透してきた。また、職員も新聞を手に取り、読む機会が多くなってきた。

さて、公職選挙法の改正により、来年から18歳から投票できるようになったことから、「主権者教育」の重要性が盛んに指摘されている。これは各発達段階で取り組まれるべきものであるが、来年からは校内に選挙権を持つ生徒がいるという、これまで経験したことのない事態が訪れる。模擬投票などが県下の学校で行われているが、今後もこのような取り組みは広がっていくだろうし、また重要性が一層高まるだろう。そうなれば、主権者教育と親和性の高いNIEがより一層注目されるはずである。

「主権者は誤謬と選択の失敗から自由になれない。しかし、それを最初から忌避すれば、多様な価値観を含むこの社会を維持することは不可能である」^⑩とするならば、主権者として成長するための試行錯誤の場が学校である。NIEの取り組みを通じて、社会を維持し、多様な価値観を持ち、他人と共生しうる主権者の育成に努めていきたい。



【引用及び参考文献・資料】

- ① 第20回NIE全国大会秋田大会資料集、5ページ。
 - ② 前掲資料、48-61ページ。
 - ③ 菅原敏著『親子でできる 秋田県式勉強法』二見書房、2015年、52-53ページ。
 - ④ 前掲書、53-57ページ。
 - ⑤ 前掲書、62-65ページ。
 - ⑥ 矢ノ浦勝之著『言語活動で展開する！秋田県式学力UPの授業づくり』小学館、2013年、111ページ（文部科学省初等中等教育局教育課程企画室専門官・元秋田県教育庁義務教育課長橋田裕氏の発言より）。
 - ⑦ これについては秋田県教育委員会が作成した「秋田わか杉 七つの『はぐくみ』」に述べられている。（秋田県教育委員会『平成27年度 教育委員会施策の概要』より）
 - ⑧ 菅原前掲書、76-77ページ。
 - ⑨ 前掲書、82-83ページ。
 - ⑩ 岡田憲治「主権者教育の意義」『月刊 教職研修』2015年9月号、21ページ。
- ・ 菊池省三著『挑む 私が問うこれからの教育観』中村堂、2015年。
 - ・ 『総合 教育技術』2015年10月号。
 - ・ 志水宏吉・前馬優策編著『福井県の学力／体力がトップクラスの秘密』中公新書ラクレ、2014年。